

せいすいき

ひらかな盛衰記

〔解説〕

文耕堂、三好松洛、浅田可啓、武田小出雲、千前軒の合作。元文四年（一七三九）四月大坂竹本座初演。

題名は、「源平盛衰記」を平仮名にやさしく絵解きしたという意味。源義経の木曾義仲を攻めるくだりから一谷の平家との合戦を題材にしています。

〔あらすじ〕

舞台は香島の里、辻法印の家。梶原源太景季は親から勘当され法印に家に居候しています。景季は義経公が一ノ谷の平家を攻めるため明日出陣するときき、自分も参戦したいと思うが、産衣の鎧兜を曲輪にいる恋人の梅ヶ枝に預けているので取りに行きたいと思っています。そのため、景季は尼ヶ崎大物の浦百姓に義経の出陣に必要な兵糧米を持参するようにだまします。しかし、百姓はその証拠に弁慶に合わせてほしい、と言ってきたため、法印に弁慶になりすまして欲しいと頼みます。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

辻法印の段

山遠うして雲旅人の跡を埋む。こゝも名に負ふ香島の

里、西国の往還とて、賤が家居も賑はへり。世に憂き事
の多き中、お筆は若君駒若殿を樋口次郎が手に渡し、妹
千鳥に廻り逢ひ、親の敵を狙はんと、上福島より彼方此
方と尋ね侘び、香島の里に着きにける。妹が身の上聞く
為には幸ひの山伏どの。

「ちと御免なりませ」と内に入り、

「私は旅の者、占がお頼み申したい」

「オ、ようこそお出で」と女房しきいた針仕事押遣り、
「薄くと一服きこしめせ」と詞のしほに差出せば、しか
つべらしく辻法印。

「愚僧が占は秘法の投算。或は失せ物走り人、夢合せ、
夢判じ、相場の高下、相性墨色、薪の雑書、釜の鳴り、

大の長鳴き、鶏の宵鳴き、鳥の行水、親父の夜歩き、息
子の看経する迄も、奇妙な見通し。銭次第」とぞ勧めけ
る。

「アイ私はたった一人の兄弟を尋ぬる者。つい廻り逢
ふ手がゝりを占うて下さりませ」

「フウそれは余程むづかしいが、端的に占ひませう」と
風呂敷より算木算盤取出し、

「コレ信を取りませうぞ。ついびりがけや三つぼのま
わりする様に投げた分ではいかぬぞや」

「成程〜。お前の様な見通しに、お目にかかるは仕合
せ」と算木投ぐれば、法印はそろばんのしやに構へ、

「オ、よし〜、年はいくつちや」

「アイ十七八でもござりませうか」

「成程十七八と見える。此方の弟御ぢやの」

「いえ〜え妹でござんす」

「ム、成程。コレ見やしやれ、算木の面に女と見える。

何年程逢はしやれぬ」

「五六年も逢ひませぬ」

「成程、五六年も逢はぬと見える。此方の尋ぬる心当ては何処ぢや」

「アイ人の噂には神崎に勤め奉公」

「オ、勤めとも〜。コレ見やしやれ。占の面には籠の中の鳥の如しとあれば、廊の外へ一足にてもふみも習はぬと古い書物に記した上は、勤めの身は籠の中の鳥。妹御は神崎に傾城奉公に疑ひない。何ときつい見通しか」

「イエ〜そりや私が口うつしを仰しやるばかり。廊の中でも何処らに居やうと方角さして下さりませ」

「ハテ滅相な。それが見える程ならば山伏はしませぬ。

相場事にかかるわいの、ナア嬢さうぢやないか。此の在

はづれを真直ぐに行けば神崎、逗留して尋ねさっしやれ」

「ハアそれなれば是非も内儀に包み銭、たとへのふしに陰陽師」と辻風防ぐ笠傾け、お筆はかしこへ急ぎ行く。

「ヤ女房ども此のお客は何処へぢや」

「サアどつちへとの先も言はず、今朝からお留守ぢやわいな」

「コリヤ悪い病が付いたわい。銭なしの手てんごうぢやの」

「ハテ俺相言はしやんな。神崎のお傾城梅ヶ枝様は得意旦那。其の誼みで誰あらう。梶原様の御惣領源太様を預り、米薪味噌塩迄梅ヶ枝様から仕送り。お歴々のあなたがそんな事何のいの」

「イヤさうでない。贅はしたし、ちゃんはなし。悪気の付くまい物でもない」と噂半ばへ、立帰る梶原源太景季、

勘当の身の寄せ所、辻法印にかくまはれ、見る影もなき素紙子一点、門口から笠取って、

「やれ／＼方々駈け歩き、存じの外草臥れた。法印さぞ待ったであらう」

「何の待ちましょ。急な事で金が入る。才覚頼むと人ばかり世話やかせ、何処には入ってござりました」

「されば／＼、其の才覚に身も歩いたところ。急な用が出来て来て、梅ヶ枝に逢はねばならぬ。と言うて紙子の風体、このなりではどうも行かれぬ」

「アノこの間まで召しましたお小袖や羽織はえ」

「女房言ふな。それはこの法印が頼まれて、七難即滅と曲げて仕舞ふた。おろせ、やりてに紙花の借錢なしなされたわい。」

「お前も言はれぬ贅張らずと傾城買には紙子が常跡」

「イヤさうでない。今迄大夫が情にて、見苦しい尾も見

せず、このなりでは行かれぬ。明日へとも延ばされぬ其の訳を聞いてたも、義経公には一の谷の平家を攻めんと、明日未明に御陣立。源太もこのたび高名せでは、父に再び対面ならず、発足と定めしが、彼の産衣の鎧兜。

梅ヶ枝に預け置き、それが欲しさに右の訳、したが思案もあればあるもの、今朝より尼ヶ崎大物の浦を駈け廻り、このたび大将義経公一の谷へ御出陣、京都より来る兵糧米、馬の飼料遅なれば、米麦大豆の差別なく今日中に香島の里、辻法印が方へ持参せよ、則ち武蔵坊弁慶殿、御判据わりし証文と引換へる。軍終らば一倍増しで御返済と百姓どもをたらせしが、イヤ弁慶様にお目にかかり其の上で御用に立てると、追付けここへ皆来をる。ここが気の毒。何とぞ急に弁慶を拵へずばなるまい。差詰め頼むは天窓役、コレ法印そなた弁慶になつたも」

「ハレやくたいもない。弁慶はつはもの。愚僧は弱者。

七尺豊かの大の法師と、五尺に足らぬちつくり法印。似ても似つかぬ。この儀ばかりはお赦しなされて」

「アイヤイヤ気づかひしやんな。しようはさま／＼、イヤこれ足を爪立つれば、四寸や五寸はくろめらるる。其の上をまだ継足して、高足駄で背はくろめる。弁慶が身の所作は仁王の形でして居りやよい。あれ／＼向ふへ百姓ども、隙どつては気の毒」と嫌がる法印無理やりに連れて一間へ入りにける。百姓共はどや／＼と吠藁奮引きかたげ、

「ヤレ／＼しんどや／＼、しんどやナ何と太郎兵、辻法のうちやどこぢやい」

「サイノあとの茶店で聞いたりや、なんでも表にメ縄が張つてあるとのこと。どこぞ／＼に、オオ／＼こぢやここぢや、しかも辻法印という表札がある」

「エ、どこに」

「ソレそこに」

「ああほんに小さいうちぢやな」

「エ、小さうても大きうても構ふことはない。そりやさうとつれの者はどうしている」

「オ、いま向ふに横たはつてゐる」

「エ、ちつとばかりの荷をもつてぐずぐずと甲斐性のないがきやナア。呼んでやらんせ」

「オ、呼んでやろ、／＼」

「オ、イ、オ、イ皆はや来いやい、はやこいやい」

「辻法のうちはどこぢやい」

「／＼こぢやい」

「どこぢやい」

「／＼こぢやい。／＼こぢやい」

「どこぢやい」

「ここぢや、く」と内に入り、

「へいごめんなされませ。アノ弁慶さまがござるのは内方にござりまするかいな。われらは大物の百姓でござりまする。お馬の飼料持つて参りました。お願ひ申します」

「何ぢやいな大勢づれで、お頼の申すおたのもうすと、お前さんは何ぢやえ」

「エエへいわたくしらは大物の百姓、大百でござります。イヤこれ太郎兵、けさ村へごんしたお侍の名を知つていやすか」

「オわらのかびたんぢやわい」

「エそんなこといふて、わかるかい」

「ヤわしものにととへて覚えてるぢや。なんでも

藁のかびたんで、わらかび、アアイヤくわらかびく、

オットさうちや、かびわらの源兵衛さんぢや。イヤもう

しお家さん。そのかび源さんが今朝私が方へお出でなされて、義経さん一の谷で戦なされるのに、兵糧米を暫く取りかへてくれとおっしゃったんで、銘々持つて参りましたのでござります」

「オ、成程なるほど、最前お噂のあった大物の百姓さん。ヤこれはしたり、私としたことがそそうな。オホ、。それなれば弁慶様もお待ち兼ね。あなた方のお出での様子申し上げん」と立つて行く。

景季は法印を弁慶に拵へ立て、一間を立ち出で、

「ヤア百姓ども、約束違へず大儀く。先程も言ひ聞かす通り、源氏の大将判官殿の御用に立つは汝等が身の大慶。軍終らば一倍増にて返さるる。御判頂戴するはありがたいか」

「ハアありがたうはござれども、只証文より手形より、弁慶様にお目見得致し、お直の詞下さるるが御判より

も慥かな」

「そりゃ百姓どもが願ひに任せ只今これへ」と反古張りの明り障子さつと開き立ち出づる辻法印。往生ずくめの弁慶出立ち、肩から裾迄束熨斗の一枚形、白上げに紺染の深夜着、女房が一張羅帯、引つしごいて蜻蛉結び、瘦せたる頬に鍋炭塗り、所斑の武蔵坊、長刀代りの金剛杖、竹簀子をぐわたくと踏み轟かす木履の継足。凄じう見られんと、ふんばたかつたる其の有様、更に強うは見えざりける。源大はわざと両手をつき、

「大物の百姓どもお目見え」と披露して、

「こりゃ〜汝等、只今下にお坐りなさる。其処ら辺りへ地響きせう。心得て驚くな」

「ハア〜はっ」と恐れ敬ひ、ためつすがめつ見られて、術なき辻法印、見せ物に出た心地なり。一人の百姓門に出で

「コリヤをかしいものぢやわい。どうもおりゃ合点が行かぬ。誰れぞよんで一ツ相談してみんならん。オイ誰れぞ一寸出てくれんかい」

「誰れぢやい」

「マア〜誰れぢやあらうと出りや知れるわい」

「ソリヤ知れた事ぢやい」

「出い〜と何ぢやい」

「オオ茂七さんか。お前そこになんしてゐやしやんす。早う這入らんせ。今お目見得ぢや、お目見得ぢや」

「サアそのお目見得について相談がしたい事がある」

「一体村の者皆あほかい」

「何ぢやい。跡も先も言はず村の者あほかいとは、ソリヤどう言ふ訳で」

「サアその訳はの、違うてる〜」

「ム、違うてるとは何が」

「サア弁慶さんが」

「ソリヤ何で」

「ハテ弁慶と言ふ者はあんな者ぢやない。おれや話に聞いている弁慶と云ふ人は、色の黒い大きなぼんさまで鎧着て七つ道具負うて、長刀持って鉢巻しめてゐやしやる。アリヤ何ぢやい、色の青白い、ひがひそな、背ばかりきよろ／＼と高いと思や、お上で下駄はいて居るが、エ、あんな弁慶さんにお目見得ぢや、お目見得ぢやと天窓地べたへ付けて、さかとんぼりになつて尻の穴から風引く事知らぬかい」

「アコ茂七さんお前もたしなまんせ。あんまり物が正直すぎる。なるほど弁慶と言ふ人は色の黒い大きな坊さんで、鎧着て七つ道具背負うて長刀持って鉢まきしめて居やしやるけれど、ソリヤおまはん、軍に出る時のなりぢや。内に居る時そんななりして居られるけ。鎧着

通しの、七つ道具負ひ通しの長刀持ち通しの、頭痛病みぢやあるまいし、鉢巻しめ通し、そしてちつと風呂へ行かかて、そんななりして行かれるけ、また長の月日ぢやもの、どんなはずみに女夫けんかせまいとも言へんての。そんな形してつかみ合うて見やしやんせ。仏壇も押入れも傷だらけ。そこへ心がつかぬかいな」

「サアそれぢやと言ふてあほらしい。お上で下駄はいて居る弁慶があるものかいの」

「サ、／＼、そこぢやてて、弁慶にもいろいろあるわい。まづかげ弁慶に、日なた弁慶、しまで言ふなら大弁慶に小弁慶、立横弁慶、仕事弁慶、飯弁慶に、茶屋弁慶、舟に乗ったら舟弁慶、橋に乗ったら橋弁慶、前へ廻つて大手上げたのが、とうさん弁慶」

「エへ、成程お前そない何時の間に弁慶仕入れた」

「阿呆言はんすないなア。マアそんな理屈ぢやと言ふ

ものぢや」

「そんなら下駄はいている弁慶は、ありや何弁慶と言ふのぢや」

「エッあれかい。アリヤアノオ、雨降り弁慶」

「エ、おかんせ、あほらしい。雨ふり弁慶と言ふものか何処にあるもので。本まの弁慶か、うその弁慶か、ア

コ、一寸ここからのぞいて見やんせ」

「その様に云はんす事ならわしも一寸のぞいて見やう。ほんにコリヤえらい違ひぢや。そして高下駄はいて夜着きて、まつ黒な汗をたらたら流し、背はきよろつと高けれど、体のわりにおつむが小さい。まるでふり売の飯蛸ぢやがな。」

「よう飯蛸ぢやえ、／＼。ふり売りの飯蛸であたまに身のない弁慶さん。あれでも強者様かいな」と目引き、袖引きつぶやけば、

「ム、扱は旦那のお顔の裏れで、誠の弁慶様でないと思ふか。都から段々打続く戦場のお疲れ、殊にこの間は

お風邪を召しておしつらひ。気むづかしさにわざと物もおつしやれぬ。アア御病気でなくば旦那の力が見せたいな」

「イヤモ御力の程はかねて承つて居ります。どうぞならう事なら御直の詞を下さりませうならば、へい／＼ありがたうござります」

「ム、それ程に思ふならばアレあれを見よ」

「へエハイ／＼太郎兵何ぞ見えるかい」

「何にも見やせんが、もうし何を見ますのぢやな」

「今お詞を下さる。お口元に気を付けよ」

「ハイ／＼。エお口元かなア」

「コリヤ頭が高い。アコココ頭が高い。あたまを低う居よ、頭を低う居よ」

「へい〜〜オイ、ソツトあをむいて見い。弁慶様が口をもが〜してござるぜ。」

「アコココあんまり傍へよらんすな。毒気吹き掛けうも知れん」

「ソリヤ今おっしゃるぞ」

「ウウンムニヤ〜〜。かもか」

「イヨホ弁慶様がかもかと仰しやつた。ハハハハ。イヤモ誠の弁慶さんに違ひはない。持って来たもの皆ここへ出さんせ、出さんせ」

「エエやかましい言ふな一人しやべって居るがな。おりやかもか位では不承知ぢやけれど、わいらが承知の事なら構ひはせんが、アノ弁慶様もあかんわい」「そりや何で」

「何でて、おいらに無心言ふやうなら面目ないぢやないかい」

「そりやマアさうぢや。それで人も言ふてる、ソレ弁慶の面目、源兵衛のげんぶくハハハハ、何ぼう力が強うても銭金子には立てつかれぬ。内証聞いておいとしい」と藁舂吠米俵めん〜〜に持って出で

「おらは白米一斗五升、大豆八升」麦稗、小豆、濡れ手で粟の掴み取り、源太は硯引寄せ手取早く証文認め、一札渡せば、受取つて

「畢竟これには及ばねど、面々の念の為軍終らば一倍増しを」

「弁さん、源さんお忘れなされて下さりますな」

「ヨオイヤ〜、ヨオイヤサ」

「ヤアコリヤ〜〜待ってくれ」

「何とした」

「けつまづいてけがしたぞ」

「ヤレコリヤどっこいあぶないぞ」

「そんならやわ／＼、ついてこい。せかずと早めて静かに来い」

「オオサ、合点ぢや承知ぢや。分った呑み込んだ」

「ア皆来い、こい／＼／＼」と打ち連れ立って、川中ではがれたためしは尼ヶ崎、大物さして立ち帰る。後見送って法印は、夜着を脱ぎ捨て、汗押し拭ひ、

「ア、仕おほせたと思ふたれば、どつかりと気草臥」

「オ、道理々々。首尾よくいたもそちが蔭。源太はこの雑穀物、金の代りに向ふへ束ね、身の廻りを請け戻し、片時も早く廓へ急ぎたし」

「実に御尤も、さりながら持ちもならはぬ肩仕事、およそこれでも一石余り、お一人ではいかぬ、／＼。時の用には法印も片端を仕らん。もしもこれにて不足ならば弁慶が脱殻の夜着も次手に曲げませう」と藁奮吠さし

荷ひ、一足いては肩をかへ、二足いては息をつぎ、香島の里に馬はあれど、君を思へば徒歩はだし、人は恋ともしらげのよねに、憂き身をやつすぞ

とうかいどうちゅうひざくりげ

東海道中膝栗毛

〔解説〕

享和二年（一八〇二）から文化十一年（一八一四）にかけて出版された十返舎一九の滑稽本。弥次郎兵衛と喜多八の二人がお伊勢参りを思い立ち、数々の失敗や滑稽を繰り返しながら江戸から東海道を旅するお話です。「栗毛」は栗色の馬、「膝栗毛」とは、自分の膝を馬の代わりに使う徒歩旅行の意味です。

〔赤坂並木より古寺の段あらすじ〕

上方見物のため、東海道を旅する弥次郎平衛と喜多八は三河の御油（ごゆ）の宿から次の宿場の赤坂へ向かう並木道を歩いています。狐がでるとの噂に喜多八が心細く思っていると、弥次さんが狐の仮面をかぶって脅かします。

やがて、二人は卵塔場（墓場）にさしかかります。弥次さんは酒を買いにきた子供を化け物だと思いこみ、殴ってしまいます。そこへお父親が登場、弥次さんはお父親にとちめられて気絶し、身ぐるみをはがれ死に装束を着せられています。目をさました弥次さんは、自分が死んだと思ひ込み、供養をしてもらうため、古寺に向かうのですが、実は、この寺の和尚は…。

※演者により詞章が異なる場合がございます。予めご了承ください。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

赤坂並木より古寺の段

いでやこの、春の景色の麗かに、往うさ来るさの稀れ人も、袖ふりはへて面白や。東路を、いつしか後に三河路や、あたふた川も打過ぎて、御灯の影もほの暗き御油の、宿をも出離れて並木原にぞ着きにける、喜多八傍へ荷を「ヤットコサ」とおろし、

「ア、ヤレ／＼くたびれた／＼、このマア弥次さんは何をしてゐるのだらう、早く来ればいいにナア、それはさうと、後の茶店で聞けば、何でもこの先の松原には悪い狐めが出るこのこつたが、ア、暗さは暗し提灯はなし、何だかコウウそつ気味の悪いこつたなア、この弥次さんはなぜ遅い、草鞋が切れたか門留めか、マロ／＼」と後を見や

りつ伸び上り、睫毛を濡らす後よりも、弥次郎兵衛は喜多八が、かねての臆病知つたれば、脅してやらんと小隠れし、思ひついたる狐の面、手拭の端引結び、顔へすつぱり引かぶり、さし足ぬき足後より

「クワイ」

「ア、申し／＼、ご免なさりませ／＼、悪い狐とは申しませぬ、まことに／＼よいお狐様でございます、ご免／＼」と云ふ声は齒の根も合はず膝がた／＼、弥次郎兵衛俄かに作り声、

「ヤイ／＼、ヤンヤライノヤイ」

「ヘイ／＼／＼ヘイ／＼のオへ、ラヘイのヘイ」

「おのれは／＼憎い奴、けふも駕舁どもが錢を一本ちやらめかし、酒肴をおごりしこと、よもや忘れはしをるまい」

「ア、申し／＼、お前さんはマアようご存じでござエやすな、イヤモホンノそれは出来心、慾気ではござりませぬ」

「ア、イヤ／＼、まだある／＼、塩井川ではゆるもなき座頭の肩におぶさつて川を渡り、あまつさへ、座頭の買ったその酒を、盗み喰ふコナ横道者めがムニヤ／＼」

「ア、申し／＼、その代りには尻が割れて、その酒代はみんなわちが払ひやしたから、その勘定は済んでございやす」

「ヤイ／＼吐かすまい／＼、まだある／＼」
「へい」

「日坂の旅籠屋では、信濃市子の婆アがところへ夜這ひにうせをつて、仏壇の中へステ、ラテンノテンテコナと落つこつた、その騒ぎをおのれが連

れの仏のやうな弥次郎兵衛に塗り付け、おのれはぬく／＼知らぬ顔、重々の不屈者、ムニヤ／＼／＼、その代りにはこれを喰らへ」と傍にあり合ふ馬の糞、杖につっかけ差出せば

「オ、くせい／＼、その馬の糞をわたくしに」

「オイヤイ」

「エ、」

「嫌か」

「ぢやと申してそれがマア」

「喰はねば連れゆくサアうせい」

「ア、申し／＼、私は馬の糞はトットモ不調法にござります、どうぞこの馬のうんこばかりはご了承願ひやす」

「ム、しからばこの以後、汝が連れの弥次郎兵衛が申すこと、何によらず、背きはせぬか」

出て見やがれ、誰だと思ふ、え、エ、お江戸は神田八丁堀九尺二間の城廓構へ、十二文で汲ます水道の水で、磨き上げた喜多人様タおらがこつた、江戸っ子でえ、べらぼうめ誰だと思ふ、エマつがもねえ」

「コウ／＼喜多公、豪儀に威張るぢやねえか、そんなに力むとソレまた今のクワイ」

「ア、コレ／＼／＼ご免だ／＼、エ、何の恐いと
思や恐し、恐くないと思や」

「どうしたと」

「なほおつかないや、こんなところに長居は恐れ」

「サア／＼往かう」

「往かう」と兩人が荷物一荷に差担ひ

「ウントコサ」

「ドッコイシヨ」

「ウントコサ」

「ドッコイシヨ」

「ウントコサ」

「ドッコイシヨ」

「坂は照る／＼鈴鹿は曇る」

「相の土山雨が降る」

「穢ねえ声だなア、ウントコシヨ」

「ドッコイシヨ」

「ウントコサ」

「ドッコイシヨ」

「ウントコサ」

「ドッコイシヨ／＼／＼、ア、コウ／＼弥次

さん／＼、アノ向ふの方に何だかコウ白いものが

ちら／＼と見えるは、アリヤマア何であらうな」

「ム、ドレ／＼あれか、あれはお前弔ひの提灯だ

い」

「エ、そんならここは墓所か、エ、気味の悪い、
なんだかコウ首筋がぞつ／＼とするようだ、エ、
コリヤ折悪うまた雨だ、忌々しい」と、つぶやき
／＼行く先へ、ちよこ／＼／＼と小坊主が、形に
も似ざるばつちよ笠、徳利片手に歩み来る、それ
と見るより喜多八が

「ソリヤこそ出たは化物ぢや、弥次さん油断せま
いぞや」と、ぶる／＼震へば、

弥次郎兵衛、幸ひあり合う天秤棒、腕にまかして
ぶちのめせば「

アイタ／＼／＼、アレ／＼、父やあい、誰かひど
い目に合はせるわやい」と、云ふ声聞付け駈けく
る親仁、この態見るより恟りし、弥次が胸座しつ
かと取り、

「ヤイ／＼この倅にはなに咎あつて可哀さうにぶ
ちのめした、ありやうにぬかせ、きかぬ／＼」と
せちがへば、

喜多八見るより「こいつア堪まらぬ、赦せ／＼」
と一散に後をも見ずして、木の根につまづいて膝
節すりむいて赤い血を流して痛さを堪へてこすり
／＼逃げて往く、

「ヤイ／＼／＼、コウ／＼喜多公／＼／＼、おれ
一人残して置いて逃げるとは胴慾だ／＼／＼エへ
へ、／＼、これは／＼お父つあんでござりますか、
エ、お前さんのお子様とも存じませず、ただ化物
様だと心得ましてぶちましたは大きな鹿相、真平
ご免下さりませ」

「イヤきかぬ／＼、折角買ひにやった五合の酒雫
も残らずこぼしてしまひ、小さい者をむごらう、

ひどい目に合せたな」と、ぐっと締めれば、

「ア、申し、コ、コ、それで喉の仏様がだいなしになります、少しゆるめて、下さりませ、イヤモ五合の酒がこぼれたとは、言語道断、お気の毒に存じやす、代はあつちが払ひやすから、一升の願ひ、かん二升とおっしゃって下さりませ、きつとお札に三升いたしますから、四升はずとご了簡コレ申し五升でござります」

「エ、洒落どころかい」

「サア、そのお腹立はご尤、疵養生には膏葉代を出しますから、それでどうぞ勘弁しておくんないませ」

「ム、金出す、それならば赦してやろう、金出せ、」

「ハイいくら出しやしよナ」

「オ、命代りには安けれど、十両に負けてやるわ」

「エ、十両、マとんだ事おっしゃりやす、十六文の膏葉を百回つけても一分で余るねエ、どうぞ二分に負けておくんないませ」

「イ、ヤなんねエ」

「二分がならざ三分」

「インヤ」

「そんなら四分」

「エ、しぶとい奴ぢや、ならぬわい」

「父さん、それぢやお前出来ない相談ぢやないか、云ひ値ぢや高い、ちと負けねえな」

「ム、そんなら十両のうち、一両負けて九両わい」

「エ、なんです、十両のうちを一両負けて九両わい、とは父さん、こいつあ洒落ですか、エ、そんなら、マア知れた半分値さどうぞそれで」

簡テナどうだい」

「ム、五両に負けいか」

「へい」

ア、五両なら安いものぢやが負けてやるわ、サア

金寄せ、金寄せよ」

「エ、ソリヤお前現銀かえ」

「知れたことぢや」

「ハイ／＼／＼ただ今／＼勘定いたしますからね、

エ、かうつと、あつちが咽喉の痛い苦しみがへ上

げて四九八九と、四九三十六匁と、八九七両二分

と、オ五両の金を差引いて、三両と六匁、お父さ

ん、お前さんの方からお釣りをおくんなせえナ」

「エ、さま／＼の痴言、モウ了簡がならぬわい」

「エ、しまった、父さん／＼お前気が短けえ人だ

ね、ア、ただ今／＼金を出しますからね、実はソ

ノ道中は物騒でござえやすから、金は胴巻に入れて、腹にしっかりと巻いてござります、父さんお

前ご苦労だが、一寸手を貸しておくんなせえ」

「ム、さうであろう／＼、これか／＼」

「ア、そりや虱紐だ／＼」

「そんならこれか」

「ア、ク、／＼、くすぐったい／＼、違ふ／＼そ

れは俺の臍だい／＼、父さんお前様のその手の下

の方に、金が二包、それでお間にや合ひますめい

か」

「エ、忌々しいべら棒め、そんならいっそこの金

を」と、力に任せ引掴みぐつと締むれば

「アイタ／＼／＼、死ぬる／＼／＼」きゅつ

とばかり、そのまま息は絶え果てたり、さすがの

親仁もびっくりし

「南無三死んだはこれ幸」と、弥次郎兵衛が帯ぐる／＼と、すっぽり剥いだる丸裸、墓所の方よりとつかはと、経帷子に角帽子手早に着せて「サア／＼、これでちつとは腹がいた、膏葉代のその代り」と、着る物荷物を引きさらへ

「仙松よ来い」と手を引いて、足早にこそ立帰る、次第に更くる夜嵐の、ぞつと身にしみ弥次郎兵衛、息吹き返し起き上り、

「オ、寒い／＼、エ、ここはマアどこだろうナ、おらア一体どうしたのだろう、エ、かうつと、マア御油の宿を離れて狐の真似をしたわと、それから小僧を打ったわと、喜多公は逃げたわと、そこで金を締上げられたわと、それから後はとんと夢中で何にも覚えねえが、アこいつあ夢か知らん、ハックション、オ、寒む／＼ア、イヤ／＼向ふに

墓所があるわい、して見りや夢ではねえ、どうしたんだろう」と撫で廻し／＼、

「ヤ、／＼、ヤア／＼／＼、おれが着てゐるは、コリヤコレ経帷子だい／＼、さうして額にはア、胡麻塩まで当ててある、ヤア／＼／＼そんなおれは死んだのか、ハア悲しやなア、さては金を締上げられ、それで死んだか、ア、ヤレ／＼お力落しな事でござりますなア、そんならここは冥途の道かいやい、ア、浅ましい心細い身になったなア、こんなことなら江戸を立つ時嬢アにも、とつくりと暇乞ひをして置かうもの、こんなに早く死なうとは知らなんだ／＼、／＼／＼／＼、冥途の道は暗いと聞いたが、ほんにコリヤ真暗がりだ、どうぞ極楽の近所まで往きてえもんぢやが、十万億土とやらいふからは、モ大抵では往かれまい、ア、

心細い／＼、かうなる事とも露知らず、さぞや後にて嬢あめが、けふはご無事の便りもあるか、あすは使ひの人もやと、日を数へ指を折り待ち、焦れたる甲斐もなう、死んだといふこと聞いたなら、さぞ悲しかろ、口惜しかろ、逢ひたかつたであらうのに、なぜ逢はしてはエ、下さんせぬぞいなア、ホイ／＼／＼／＼／＼／＼、魂魄アレあの世に返るならも一度嬢あの顔見たや、それまでもなく今ここでおれが死んだら後編に、さぞや一九が困るであろ、それも悲し、嬢あも可愛し、ホイ／＼／＼／＼、心一つを二道に、冥途の闇に迷ふとは何の因果ぞ、情けない、どうぞマ一度生き返り、嬢あと閨の添ひ伏しが、ア、したい／＼／＼わいの」と身をもたへ、すすり上げたる水洩と、涙と涎一時に落ちて流る、三つ瀬川末は漲る風情なり

「ハア、迷うた／＼、アノ鐘の音はたしかにお寺、極楽浄土の導き頼み、お十念でも授からう、オ、さうぢや／＼」と立上り、鐘鳴る方を導にてたり、行くこそはかなけれ、かくとも知らず喜多人は、やう／＼遁れこの寺へ、一夜の情け丸寝して夢となくまたコレマ現とも、なき寝入りたる折こそあれ、哀れ世の、はかなきものは蜻蛉のありやなく／＼弥次郎兵衛、死んだと思ひつめたさを堪へ兼ねたる雨涙、灯影導に立寄つて、さも哀れげなる声音にて、

「申し／＼、私は娑婆の者、お願いあつて参りました、どうぞお願ひ申します」と、云ふ声聞きつけ和尚は立出で、

「誰ぢや／＼何用ぢや」と戸口のかけ金表にも、「和尚様、私は今死んだ死にたてのほや／＼亡者

でござります、どうぞお助け下さりませ」と、云ふ声寝耳に目覚す喜多人、起きると明ける門の口、弥次郎兵衛が姿も暗紛れとらへる袖のふり合はせ、和尚と心得弥次郎兵衛を無理に引込み取り違へ戸口を内から、びっしやり引立て、

「ソリヤこそ亡者が来をつたぞ、和尚様／＼、必ず外へ出まいぞや、戸口はおれが押へてゐる、ア、門にゐるは幽霊ぢや／＼、おのれを入れてよいものか」と、云ふもがた／＼膝わな／＼、寺の地震で洞震ひ

「エ、何だかコウ真暗がりでは何にも分らねえや、火打ちはいづく」と暗がりを、探る手先に火打箱、がち／＼震ふ付け木の光、

「エ、コリヤ和尚ぢやない、幽霊ぢや／＼、ア、赦し給へ／＼」と着る物を、頭へすっぽり引

冠り正体さらになかりける、弥次は恨みの震ひ声、
「ノウ恨めしい喜多人め、おのれはおれが締め殺されるを、見捨て、よくも逃げをつたな」「ア、赦し給へ／＼」

「イヤ／＼恨みの魂魄この世に残り、汝も冥途へ道連れに、いざ連れ往きて思ひ知らさん来たれや喜多人サア来い」と、附け廻されて喜多人が、気も魂も消え入るばかり、

「ヤア／＼／＼そんならお前は殺されて迷うて来たかハア悲しやなア、さうとは知らず今までも、この弥次さんはどうしてぞと、案じて後へ戻らうにも、何分恐くて一足も、後へ帰れることかいの、しやうことなしにこの寺頼み、泊めて貰うたばかりぢや、これまでの誼みを思ひ、恨みを晴らして浮んでくれ、南無阿弥陀仏／＼、南無妙法蓮

華経くくく、助け給へ、天理王の尊、アーメン」

「イヤ／＼、修羅の苦患もその方ゆゑ、ただ恨めしや冷飯や、強飯や、お茶の飯や麦飯や、とろゝに奈落へ連れ行くぞ」

「ア、コレ／＼人殺しや、助けて給へ、和尚様／＼なう」と呼ばはりわめけば、戸を蹴放し、和尚は駈入り押し隔て、数珠さら／＼と押しもんで

「東方には五三一、南方にはぐんだり夜叉明王、西方でん／＼九馬の三、北方どうには五六十、中央だんまりふつとい明王、五千ありや所詮ふけん／＼泊れや泊れ、浮かめや浮かめ」と祈りける胸に当りし弥次郎兵衛

「赦させ給へア、ラ苦しや、我こそ東の都に住む弥次郎兵衛といふ者なり、御油の宿の泊りにはづれ、不慮の最期を遂げたりしが、日頃からの念仏

嫌ひ、冥途の闇路に方角知れず、何とぞ出家のお情けに、弥陀の御国へお導き頼み上げます／＼」

と、涙と鼻を横撫でに恐れ恐れて願ひける、和尚うなづき

「善かな／＼、冥途の道の引導は、差当つたる愚僧が役、さりながら、布施ない経は読み難し、地獄の沙汰も銭次第、布施物持参めされしか」と、聞いて弥次郎兵衛頭をかき、

「ハ、なるほどご尤、路銀も少々あつたれど、御油の宿にてすっぽりはがれ、身はちゃんぷらんの素寒貧、どうぞお慈悲に結縁にて、弥陀の御国へ御引導、お授けなされて下さりませ」

「アイヤ／＼近年は世がらが悪うて、寺から里の力持ち、それゆゑ現銀掛値なし、銭なき衆生は助からず、七里けっぱい、ぜかせ／＼」

「それは何とも是非がない、コレ／＼喜多人、今聞く通りのこの仕合せ、どうぞ貴様が持つてゐる路銀をおれに貸してくれ」

「エ、滅相な／＼、この金貸してたまるものか、エ、とんだこつたい／＼」

「そんなら嫌か、エ、恨めしや」

「ア、コレ／＼貸すわいの／＼」と、肌につけたる胴巻を、ぐる／＼はづし和尚の前、さも惜しさに差出し、

「ハイ／＼申し和尚様、この金はわっちが命代りの銀なれど、かう見込まれたらしよことがない、どうぞこれにてご引導、授けてやって下さりませ」

「オ、善かな／＼、さりながら、コリヤコレ僅か

二三両、十萬億土の道なれば、宿々泊りの旅籠代、

木賃にしても足らぬ／＼、その上三途の川の越銭、

婆あの運上、極樂の東門番へ心付け、四十九日や五十両、合せて百兩百か日の追善供養、お茶湯代にも足らん／＼」

「ぢやと申してモウそれ切り、一文もござりませぬ、身についた物としては千手観音様ばかりでござります」

「そんならそこで裸になり、着類残らず脱がっしやれ」

「エ、それぢやお前さん、寒くて堪へられやせんやネ」

「ム、そんなら死人はこなたの連れなれば、連れ去んで貰ひましょ」

「エ、滅相な事おっしやりませ」

「しからば脱がっしやれ」

「ぢやと申してこれがマア」

「そんならおれがちよつと負はれうか」

「ア、コレ／＼飛んだ事たい／＼、幽霊をおんぶしてどうなるものかい」

「そんなら脱ぐか」

「サアそれは」

「サア／＼」

「サア／＼、これはまた情けない、ハテ何とせう是非がない、アイ脱ぎます／＼」と、不承／＼に帯ぐる／＼と布子もろとも引丸め、差出し

「ハイ／＼／＼仰せに従ひ脱ぎましてござります、時に一つのご訴訟、ご覧の如く無禪、倅不憫と思し召し、せめて一重のこの襦袢、ご用捨なされて下さりませ」

「ア、善かな／＼、しからば導きいたさん」と、数珠取上げて勿体らしく「汝元来しやれ木の如く、

臨終正念茶々無茶く、足は飛ぶに任せ帰るを知らず、こいつ元来江戸っ子にて、ちつぱら／＼はらはり込み、金銀財宝芥の如く、遣ひ無くし、女郎小娘下女芸者後家尼人の女房まで、ちやらくら魂胆手管をもって、トウおんころ／＼せんだりまきやア、おんころ／＼洗濯婆あ、のうまくさんまんだ、なう婆さん洗濯ぢや、こいつは一切道楽ぢや、南無三宝めつぼうかい、夢中さん／＼らっぴらんぐあい、五十三次股にかけ、道中達者洒落悪口、喧嘩口論その癖聞いた風、めつた無性強い顔、お先真暗大きに臆病、それゆえ丸裸、やみくも言語道断、何ぞいふと畜生呼ばはり、馬牛犬猫狎、あしたに道を聞いて夕べに死すとも何ぞ厭はん丸裸明朝覚め来ってすべて夢の如し、ア、恐るべし／＼、クシヤ／＼／＼、この行先は菰冠り、往きた

いところへつと往け」と、衣裳路銀を引さらへ、
一間の内へ入るよと見えし、和尚が姿たちまちに、
ありし家居も一時に、消えて跡なく明鴉、ただ呆
然と弥次郎兵衛

「どうしてこゝへ喜多人も」互に顔を見合はせて、
呆れ果てたる馬鹿らしき、

「ア、コレ／＼弥次さん／＼、お前の形はソリヤ
一体何といふ形ぢやエ」

「エ、オヤ／＼／＼／＼こりやどうしたんだろ、
おいら夕ペ死んだ筈だが、オ、かの親仁めにすつ
ぼりと剥がれてしまった」

「わしも坊主にみな取られ、裸百貫一文無し、今
の坊主はどこへ往たの」

「やっぱりあいつも狐であらう」

「てえさうに化かされたぜ」

「さう云つてもあんまり智恵がない、馬鹿々々し
いぢやないか、イヤコレ喜多公、どうぞ仕やうは
あるまいかな」

「サアどうと云つたら乞食より、他に思案は、な
いわいなア」

「アコゝゝ、コリヤヤイそんな心細い事云ふねえ」

「それだと云つてどうなるものかい、お前も裸お
れも裸、オ、弥次さん／＼、一句うかんだぞ、『ど
うせうぞ、何と和尚にみな取られ、やう／＼襦袢
一つ喜多人』、てなどうだい」

「妙々、うまくやりやがったなあ、ドレおれも何
か一つやってやらうか『夕べまで重ね着でゐた弥
次郎兵衛、けふ帷子になった哀れさ、』てなどう
だい。しかし夜が明けたにこんなさまで、うろ／
＼してもゐられまい、よい思ひつきがあるまいか」

世の人の、笑ひの種となりにけり

「ここに箒の古いのがある、これでおれが奴を振るから、お前はその下駄の古いので拍子を打ちなせえ、さうしてなりとも往かうぢやないか」

「ヤこいつはいい智恵だ、面白い、そんなら喜多公、振り出せろい」

「とっかけべい」

「ハレワイサノサ」

「コレワイサノサ」

「タベもさん／＼化かされた、裸で道中になるものか」

「なつてもならないでもしよ事がない」

「ハレワイサノサ」

「コレワイサノサ」

馬鹿な宿入り大鳥毛、ヒン／＼ドウ／＼、しゃんこ／＼、夢路をたどる心地にて、膝栗毛とて